

熊本大学日本史研究室資料保全継承会議・安高啓明研究室

長崎・熊本両県における自然災害（地震・噴火・津波）に関する総合調査

—寛政4年「島原大變肥後迷惑」の文献・慰霊塔を中心に—

調査期間：平成30年9月1日～令和元年6月30日



【調査研究の内容・目的】

- 平成28年に発生した熊本地震を教訓に、江戸時代に熊本地方で起った震災の歴史資料や民俗資料を調査し、次世代へその実態を伝えていく。また、地域に埋もれた史資料の発掘に努め、資料の保全を訴えていく。なお本年度は天草地方を対象とした。
- 歴史学の調査手法に基づき、古文書や供養塔などの関係資料の調査、古文書や碑文の解読を通じて、当時の状況を正確に記録していく。被災した人たちのリアルな息遣いや、復興のために行政がとった政策などを詳らかにしていくことを目指していく。
- 過去に起こった出来事を教訓として伝え、特に海に囲まれた九州にある県として、地震と津波による被災状況を正確に記録する。海洋教育の一環として、寛政4年の地震と津波をとらえて、情報発信していく。

1. 調査研究内容の詳細

【調査研究代表者】

- 安高啓明（熊本大学大学院人文社会科学研究部 准教授）

【調査研究分担者】

- 松本博幸（天草市文化課 参事（学芸員））
- 吉田信也（島原市教育委員会 主任（学芸員））
- 久保春香（雲仙市教育委員会 主事（学芸員））
- 長屋佳歩（熊本大学大学院生）
- 山下葵（熊本大学大学院生）
- 川端駆（熊本大学4年生）

【実施計画】

- 2カ年計画2年目

【主な調査研究対象など】

- 天草島内の供養塔調査
- 熊本大学の古文書調査
- 研究成果の発信



天草島内に現存する「島原大変肥後迷惑」に関する供養塔を調査した。かつて調査されていた供養塔リストを再精査し、現状の悉皆調査を行なった。これにより以前の所在地からの移転があったり、供養塔と特定し得ないものがリストに掲載されていることがわかった。また、風化による欠損も確認できたため、3基の拓本を採取した。

本調査により、正確な供養塔の状態を把握することができ、当時の被災状況を確認することができた。本研究テーマは伝承も多く、不確実な情報も錯綜している。歴史学的手法に基づき被害状況を確定し、史実を特定していったことは、天草や島原に住む人々に噴火と津波に関する正しい理解を発信することが可能となった。また、拓本を採取したことから、現状の碑文を保存することができた。これは、後述する展示でも活用し、見学者への理解の一助とすることになった。



熊本大学附属図書館で管理されている「島原大變肥後迷惑」の古文書や絵図面の調査を行なった。本件に関する資料は全国各地に散在しているが、熊本ではどのように伝わっているのかを知り得ることができた。熊本大学附属図書館の資料は、細川家伝来の永青文庫資料であり、対岸の島原藩の状況をどこまで入手していたのか課題だった。本調査により島原城下の被災状況を詳細に把握しており、それを絵図面で残すなど後世に伝えるべき自然災害をアーカイブしていることを確認することができた。

本調査の成果を受けて、古文書調査に不得手な分野、例えば、地理学といった研究領域にも参考となる情報を発信することができた。地理学の分野との協力も今後期待でき、複合領域による災害の捉え方、教育普及活動の展開が可能となった。



天草島内の供養塔の調査（撮影・実測・拓本）した成果、古文書の分析から浮き上がってきたことを、報告シートと展示会で発表した。一般の人にわかりやすい表現、レイアウトに配慮して企画した。報告シートの作成や展示会の立案、展示作業に本事業の協力者である大学院生を参加させ、今後の博物館活動を担う人材育成を同時に行なった。調査→報告シート→展示といった博物館学芸員が担う業務を現職の学芸員や教員からの指導をうけて体験することができ、次世代の学芸員養成プログラムとして体系化された事業となった。

このプログラムに参加した学生・院生たちが博物館に就業することにより、海洋教育の視点をもった学芸員として活躍することも期待できる。歴史学の実証史学に基づきながら、四面を海で囲まれた日本で生きてきた人々がどのような想いを抱いていたのか考えさせる教育を行なうことができた。

本調査を踏まえて成果報告シートを作成した。小中学校の先生への理解を深める教材・テキストとなり、朝日新聞からも取り上げられ、各地に成果を発信することができた。

2. 本調査研究成果を基に計画・実施可能な 「海の学び」に繋がる博物館活動案

■博物館活動の形態：天草と「島原大変」～「島原大変肥後迷惑」の記録と記憶Ⅱ

■実施時期：令和3年10月1日～12月20日

■実施場所：熊本大学附属図書館・天草キリシタン館・島原松平文庫

【実施内容】

■安高研究室で所蔵する古文書を展示し、古文書や絵図から読み解いて「海の学び」の立場にたった被災状況や供養の実態を紹介する。

■津波での死没者を供養するために建立された碑の拓本の実物と写真パネルを作成し、当時のリアルな息遣いを紹介する。

■効果的かつ広域に発信する媒体となる、海洋教育を視野に入れた解説シートを作成し、現地へ訪れるきっかけとなるようにする。

■一連の作業に大学院生や学部生を参加させ、将来、博物館学芸員として就業する際の参考となる実践教育を展開する。

【他の博物館・機関や地域社会との連携や取り組み内容】

■申請団体は、天草市立天草キリシタン館でサテライト展示のブースを持っている。そこで天草側の被害状況などを伝える展示を行なう。

■熊本県内に県立・市立・財団含めて博物館施設があるため、これらを会場にした企画展へ発展することも期待できる。

■歴史愛好家などが集まるグループが県内にはいくつかあり、ここに参加している人たちに、本事業を紹介するとともに、成果を提示する。そこから本団体と協働体制が築けることが期待できる。

【特に学校教育との連携について】

■熊本大学の付属学校、島原市内や天草市内の小中学校など、総合学習等の時間で本テーマを取り上げてもらい、必要に応じて講師派遣を行なう。

■大学生で学芸員課程を履修している学生に、海洋教育の視点をもたせる教育を行なっていく。学部教育と課程教育の横断的な実践教育を行なっていく。

■本事業に参加していた学生たちが博物館や自治体に就職しているため、彼らを通じて海洋教育を展開していく。

■今後は学校教育・防災教育を専門にしている大学院生を参加させ、より高度な学校教育との連携を理論的かつ実践的に展開していく。

【事業全体のまとめ】

前年度の島原地域での調査と比較して、下記のことが詳らかにすることをできた。

- ・島原は藩主主導で被災者・流死者を供養する行政政策が展開されたが、天草では民間有志による供養が行われている。
- ・島原藩は松平家という私領だったことに対して、天草は天領で預かり地として支配されていたことによる支配形態の違いが供養塔建立にも反映されていた。
- ・天草の供養塔は島原に比べて小型で、砂岩が用いられている。供養塔の分布も全て島原の対岸にあり、流死人に対する素直な追悼の意が示されている。
- ・未曾有の災害に直面した天草でも、海からの平時の恵と災害との緊張関係が潜在的に存在しており、これは現在にも通じる普遍的な概念だったことを海の学びのなかに位置付けた。
- ・供養塔のなかには、損耗が激しいものや風化が進んでいるものもあった。法量を計測し、碑文の解読にはあたり、一部は拓本等の作業に着手した。今後は拓本作業とともに3D デジタルでの保存を進めていき、後世に記録を残し海の学び活用できる教材を作成していきたい。

主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 天草市立天草キリシタン館	展覧会の実施
2.	
3.	
4.	
5.	

主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. 読売新聞朝刊	令和元（2019）年6月8日
2.	
3.	
4.	
5.	

以上